## 富沢霊岸著
## イギリス中世史概説

ブリタニアの古代から一四八五年バラ戦争の終末まで。これが本書のカバーする期間である。従って、主な項目はローマ領ブリテン、アングロ＝サクソン時代、アングロ＝ノルマン英国、いわゆるアンジュー帝国、ランカスター＝ヨーク時代。そしてその間に適宜社会文化の変容が織り込まれる。文字通り万遍なき英国中世史の概説である。とくに政治史は詳しく、今後本書はその点については辞典的意味を果すであろう。何百の地名人名がでるであろうか。これだけでも、筆者がどんなに筆まめな人かが分る。

概説というものはむつかしい。実際これは講義をしたものでないと分らない。著者は謙虚に本書はオックスフォード版英国史を圧縮したといっているが、それにしてもあの何巻かにわたる盤根錯節の史書をこれだけに纏め上げるのは、大変な努力であったと思う。おそらく、これは氏が永い北陸生活のまにまに講義されたものであろう。淡々としたその語り口にも、雪に閉された精進の日々が偲ばれてならぬ。昔学生時代に聞いた講義のよしあしは、年経てある日忽然と分かるものである。このような議義を聞かされた学生は、何冊のノートになったか、幸な人々かも知れない。

ただ、欲をいえば、概説とはいえ、どこかにいくつかの山があって欲しかったという気はする。章の推移がこれを語るのだろうが、そこで歴史がどう屈折するか、その辺のところが聞きたかった。アングロ＝サクソン期はさすが氏の永年の努力のあと、しかもふつうの通史にないだけに興味があったが、私見によれば十一世紀のノルマンの征服、十三世紀バロニアル・ウォーの意義づけなどは、もっと強調されてよかったのではないか。アングロ＝サクソン期においては、デーンロー社会の位置が欠落しているように思えた。著者の激しない性格かも知れないが、全体として本書は、古きも新しきに接続する連続史観に立っている。ただ私は、いまだにその息吹きのなくはない旧デーンローの辺縁に暮し、広大なノルマン・ホルダーネス領の城趾を眺めくらしたからかくいうのであるが。

最後に人名・地名の読みにつき、以下の発音転写は若干のなじめないものをもったことを付け加えておく。Ptolemy, Cirencester, Ermine, Badon, Southampton, Wiltshire, Reading, shire reeve, Maldon, Cinque Ports, Pembroke, Wycombe, Berwick, Monmouth, Newcastle, Harfleur など。この点、索引にだけでも是非原綴をだしてほしかった。それから十一頁アントニウスの長城はアントニヌスの誤り。本文中もまたしかり。地図上トレント川の位置も直されたい。

ともあれ、この短い小文に、私は本書のよさを、なにがしか言いえたであろうか。そうあることを望みたい。

（B6判二四五頁　昭和四五年六月　ミネルヴァ書房刊　定価八五〇円）

（越智武臣）